

北の街物語

新装版

内田康夫

Yasuo Uchida

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

目次

第一章	消えた妖精
第二章	彫刻教室
第三章	荒川岩淵関殺人事件
第四章	「3731」
第五章	家族写真
第六章	叔父と姪と探偵と
第七章	大宮ケイリン
第八章	妖精のゆくえ

あとがき

313	274	233	195	157	120	80	46	7
-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	---

北の街物語

第一章 消えた妖精

1

末次瑞恵が「風呂屋の娘」であることを、浅見光彦はつい最近、彼女と再会するまで知らなかった。ちょうど十五年ぶり、高校を卒業して以来の遭遇であった。

近頃、どういうわけなのか、赤羽界隈がちょっとしたブームなのだそうだ。ある雑誌の「東京の面白い町」という特集企画で、ベスト10の

十位にぎりぎり入った。これは地元の人間でさえ意外に思うほどの大拔擢だったのである。

赤羽は東京都北区にある。といっても、北区の存在自体、東京都民ならともかく、余所の人間にはまるで知られていない。まして赤羽など、JR京浜東北線の電車の駅——ぐらいにしか認知されていないだろう。東京の北の外れ、その先はもう、荒川を越えれば埼玉県川口市なのだ。

その赤羽がいまなぜ人気なのか——を確かめる記事を書く注文が、雑誌「旅と歴史」から舞い降りた。北区の住民の一人である浅見にとつてはもってこいのような企画だが、じつをいうと、浅見は赤羽のことをよく知らない。同じ区内とはいえ、浅見の住む「西ヶ原」は北区の東の外れ近く、赤羽とは対極の側にある。たぶん十年ほど、浅見は赤羽を訪れていないような気

がする。

消息通の編集者から「旨い蕎麦屋がある」という話は聞いていた。赤羽駅前的一角、飲み屋が軒を連ねる、通称「OK横丁」の「清水庵」という店がそれだ。蕎麦好きの浅見は、あえて昼時に照準を合わせて取材に出掛け、いの一歩に清水庵に向かった。五月半ば、薫風くんふうというにふさわしい日であった。

赤羽駅前にはアーケード街があり、そこを抜けてもかなり広範囲まで商店街が密集している。地方都市の駅前がシャッター街と化しているのとは対照的だ。

横丁というから、薄暗い路地を想像していたのだが、そんなことはなく、幟旗のぼりばたやら看板やらが色とりどりに妍けんを競う陽気そうな通りに、ちまちました店舗が軒を連ねる、いかにも下町

らしい、いい意味で雑駁ざつぱくな雰囲気ふんいきの街であった。この辺りが人気の秘密なのかもしれない。

通りの風景をカメラに収め、清水庵の外観を撮った。住宅兼店舗と思われる瀟洒しょうしゃなタイル貼りの三階建てだが、一階部分だけ引き戸に白木の格子を嵌はめて、和風を強調する造りの店構えがなかなかいい。

紺地に「清水庵」と染め抜いた暖簾のれんを潜くぐって入る。まず目に飛び込んだのは、御神輿おみこしの屋根を思わせる天井。これは圧巻だ。周囲の壁には至るところに浮世絵風の版画がかかって、江戸風を演出している。

店内は満員の盛況で、たまたま一人分だけ空いている席に「お相席でもいいですか？」と案内された。小さなテーブルの向かいには女性客がいた。

浅見は「失礼します」と挨拶して坐った。もちろん、相手の顔をしげしげと見るような不^ぶ躰^{しつけ}な真似はしない。しかし、女性のほうはそうではなかったらしい。しばらくすると、「あの……」と話しかけてきた。

「間違つてたらごめんなさい。浅見さんじゃありませんか？」

「えっ……」

思わず視線を上げた。若い——とはいいがたいが、三十歳前後だろうか。渋い紺色のブラウスの上に淡いブルーのジャケット。やや短めのヘアスタイルが首の長さを強調している。色白で目の大きいエキゾチックな印象さえ与える美人だ。

そこまで観察したものの、相手が何者なのか思い浮かばない。どこかで会ったことがあるよ

うな気はするのだが、これだけの美女ならすぐに分かりそうなものである。何か適切な対応をしなければ——と焦った時、まるで天の助けのように、店のおばさんが「ご注文は？」と聞いてきた。

「えーと、天ざるをお願いします」

ざる蕎麦の大盛りのつもりだったが、つい見栄を張った。

「あら、私と同じ」と女性が嬉しそうに言った。「瑞恵ちゃんのお知り合い？」とおばさんが訊^きいた。その様子だと、女性は馴染^{なじ}み客らしい。「うん、たぶん……間違つてなければ、私の先輩」

訊いたおばさんが戸惑うような微妙な答え方だが、その瞬間に浅見は思い出した。

「えっ、それじゃ、きみ、末次……さん？ 小

石川高校の？」

「ええ、そうです。末次瑞恵です。ああよかった、覚えてくれたんですね」

「それはもちろん……しかし驚いたなあ。こんな美人の知り合いいないから、ぜんぜん分かんなかった。へえーっ、あの末次さんがきみなのか」

「あはは、それってお世辞なんですか。それとも昔はよっぽどひどかったとか」

「いやいや、現在の印象を率直に言っただけですよ。しかし正直、間違えたなあ」

末次瑞恵は浅見が部長を務めていた文芸部の一年後輩で、可愛かったがそれほど際立って美少女というわけでもなかった。よく、毛虫が羽化してチョウになると言うけれど、その比喩は正しい。

「浅見先輩は変わりませんね。みんなの憧れの的だった頃そのまま。でも、すっごく立派になつて……」

「おいおい……」

浅見は周囲を気にして、声をひそめた。生まれてこの方、「立派」だなどと言われたためしがない。いつも秀才の兄と比較されて、世間ではあからさまに「浅見家の落ちこぼれ」と噂されていくくらいだ。

「この店、よく来るの？」

「ええ、わりと近所ですから、散歩がてら時々来ます」

「ふーん、そうなのか。あの、いまは何て呼べばいいんですか、名字は？」

恐る恐る、訊いた。

「末次のまんまですよ」

瑞恵は含み笑いの表情で言った。

「あ、失礼。つまらないことを訊いた」

「気にしないでください。もう開き直ってますから。浅見先輩はお子さんは？」

「ははは、お子さんどころか、僕ももう、開き直っているほうのクチだよ」

「あら……すみません」

また嬉しそうに笑って、首を竦めた。

瑞恵の天ざるが運ばれてきた。瑞恵は「お先に」と手を合わせて、箸を使い始めた。

浅見は視線のやり場に困って、店内のあれこれを見渡した。小ぢんまりした店で、十五、六人も入れば満席になりそうだ。「手打ち蕎麦」の看板を掲げる店で、信用できるのはこの程度の規模——というのが浅見の哲学だ。百人も入るような店で純粹な手打ち蕎麦を期待するほう

が間違っている。

視野の片隅でとらえる瑞恵の咀嚼^{そしゃく}ぶりは、けっこう板についている。背筋を伸ばした姿勢がいいし、蕎麦^{ちよこ}猪口^{しぐさ}の構え方、蕎麦のつまみ方、口へ運び^{すす}啜る仕種、すべて間然する所なく、理に適^{かな}っている。何よりも無口なのがいい。和食にせよ洋食にせよ、ほかの料理は会話を楽しみながらというのもありだが、蕎麦だけは無口でなければならぬ。真正面から蕎麦だけを見据えて、親の仇^{かたき}に会ったような真剣さが望ましい。

それにしても、女性が一人で蕎麦を食っている風景はあまり見かけない。男なら珍しくもないのに、女だと何となく侘^{わび}しい感じを受けるのは、一種の性差別かもしれない。いったい彼女はという暮らしをしているのだろうか——と、

想像が広がる。

浅見の蕎麦がやってきた。まず天ざる蕎麦の付^{たす}まいを撮影してから箸をとった。菌^ぐごたえのしっかりした蕎麦と、出汁^{だし}の利いたつゆに期待感が高まる。揚げたての天ぷらにも納得。自然に頬が緩む。

瑞恵はすでに半分を消化し終えていたが、浅見のスピードなら追いつけそうだ。案の定、ほぼ同時くらいに箸を置き、蕎麦湯をもらった。トロリと濃厚で、つゆの風味との一体感がたまらない。

「旨いなあ」

浅見が言うのと、「でしよう」と、瑞恵は合意の手のように言ってから、訊いた。

「先輩は今日は何か、お仕事ですか？」

「うん、仕事です。赤羽の人気の秘密——みた

いなルポを書く、その取材。この店に来たお陰で、第一印象はすこぶる良好だな」

「あら、浅見先輩は探偵さんじゃないんですか？」

ドキツとするようなことを言われ、浅見は慌てて唇に人指し指を当てた。「探偵」に反応する周囲の視線を感じた。

「僕はフリーのルポライターだよ」

「でも、聞きましたよ、小松^{こまつ}さんから。小松^{こまつ}美保子^{ほこ}さん、先輩も知ってらっしゃるでしょう？」

「ああ、おふくろのお絵描き仲間ですね」

「お絵描きだなんて言うとお母^{お母}さまに叱^{りつ}られますよ。それに、小松^{こまつ}さんは立風^{りつふう}会の若手ナンバーワンって言われてるんですから」

立風会^{たていせいかう}というのは立石清風画伯が主宰する美

術グループで、アマチュア相手の絵画教室も開いている。浅見の母親、雪江ゆきえも小松美保子もそのメンバーだ。以前、美保子の絵が盗まれ、それが殺人事件にまで発展するという騒ぎがあった時、浅見が乗り出して事件を解決した（『赤い雲伝説殺人事件』参照）。それ以降、「浅見探偵」の虚名が関係者から口コミで伝播でんぱしつつある。

「小松さんのことは知ってるけど、とにかくここでそういう話はまずいよ。場所を変えませんか」

浅見はポケットから剥むき出しの千円札を数枚、掴み出しながら席を立った。瑞恵の分も払うつもりだったが、瑞恵がそうはさせてくれずにワリカンで納まった。

店を出てすぐのところに、ここも小ぢんまりした、「珈琲」の看板を掲げたレトロっぽい喫

茶店がある。瑞恵は浅見の同意を求めず、ためらうことなくドアを開けた。コーヒーの香りがスーッと流れ出た。

柱やテーブルなど、木製の部分はすべて濃褐色で、壁はベージュのクロス張りという、外観同様、インテリアもレトロな雰囲気にとめ、流す音楽もカウント・ベシーと、どこまでも渋い。

カウンターの中で、おそらくマスターではないかと思われる初老の男がコーヒーをいれている。ほかにはウェイトレスが一人いるだけで、客は浅見たちを含めて二人客が三組。それほど繁盛しているようには見えない。

「浅見先輩もコーヒーですよね」

瑞恵は勝手に決めて注文した。マスターやウェイトレスの挨拶の仕方を見ると、この店もど

うやら瑞恵の馴染みらしい。

「小松美保子さんとはどういう知り合いなの？」

おしほりで手を拭きながら訊いた。

「彼女、中学の後輩なんです。そんな関係で付き合いができて、絵を描いてもらったりしてます」

「ふーん、つまり芸術家のパトロンっていうわけか」

「ははは、そんな大それたもんじゃないですよ。うちのお風呂場に飾る絵です」

「えっ？ お風呂場につて……すごいなあ、バスルームに絵を飾るの？」

「ははは、おかしい……」

瑞恵は質問には答えず、代わりに身をよじるようにして笑う。何かよほど間抜けなことを訊

いたらしい。バスルームに絵を飾るといって、

アラブの王様の暮らしみたいだが、末次家ではごくふつうなのだろうか。

「きみん家はどの近くなの？」

話題を変えた。

「ええ、志茂^{しも}五丁目」

「というと、確か岩淵^{いわぶち}水門の近くじゃなかったっけ」

「そう、よく知ってますね」

岩淵水門というのは、荒川をせき止め、調整された水量を隅田川^{すみだがわ}に流す巨大な水門だ。東京の歴史によほど詳しくないと、本来の荒川が隅田川そのものだったことは、あまり知られていない。

荒川はかつてその名のとおりの暴れ川で、江戸、東京は長梅雨^{ながつゆ}や台風で洪水に見舞われるこ

とがあつた。大正に入ってから、治水のために新たな水路を掘削くつきくする作業が始まつた。現代と違つて重機など充実してなくて、工事は人海戦術で行われることが多かった。工期も予算も当初の予定を大幅に超える難工事で、犠牲者も二十二人を数えた。一九二四年に岩淵水門が完成。一九三〇年に「荒川放水路」が完成した。現在、東京湾に注ぐ大河を一般に「荒川」と呼んでいるのはこの放水路のことである。

浅見は小学校の遠足で一度、行ったことがあるけれど、巨大な岩淵水門と、その周辺の隅田川と荒川が分岐して流れてゆく大堤防のある風景は、ここが東京とは思えない壮大な眺めだった記憶がある。

「末次さんは、仕事は？」

「家業の手伝いっていうと聞こえはいいですけ

ど、ニートみたいなものかな」

「お宅は、どんなご商売？」

「ですから、お風呂屋さん」

瑞恵は（しようがないわねえ——）という面持ちで言つた。

「あ、そうなの……それでお風呂場に絵なのか……ははは……」

浅見は自分の勘の悪さに呆あきれ、笑つてしまつた。瑞恵の言つた「絵」とは、浴槽の背後の壁に描かれた風景画のことらしい。一種の壁画にはちがいないが、あれを小松美保子が描いているとは驚いた。しかし、それはともかく、目の前の女性、それもエキゾチックな美人の家業が銭湯などと、想像できるはずがない。

「そうなんですか、先輩は知らなかったんですか。高校時代、けっこう、皆にからかわれたん

ですけどねえ」

「からかわれる？ どうして？」

「おまえは男のヌードが見られていいって言うて」

「えっ、ほんとに？……」

浅見は呆氣あつけにとられ、慌てて口を閉ざした。

落語に「湯屋番」というのがある。能天気な若旦那が風呂屋の番台に上がらせてもらって、あれこれ妄想を逞たくましゅうする噺はなしだ。確かに、銭湯の娘なら、親の手伝いで番台に上がることがあつても不思議はない——のかもしれない。もつとも、女性にもそういう趣味があるかどうかは知らないけれど。

「番台になんか、上がったことはありませんよ」

浅見の妄想を察知したように、瑞恵はきつい

口調で言った。

「えっ、もちろん、そうでしょうね」

「だいたい、いまの銭湯には番台そのものがないんですから」

「あ、そうなのか」

浅見家は昔から内湯だから、浅見には銭湯体験がほとんどない。ごく小さい頃、断水か何かで一度だけ近所のお風呂屋に行った記憶があるが、最近ではせいぜい、温泉へ行つて大浴場に入る程度だ。だから、いまだに「湯屋番」のような番台があるものとばかり思っていた。

銭湯は男湯と女湯に分かれてはいるが、入口で入湯料を受け取る番台はその両方が見える条件を備えている。若旦那でなくても、男にとつては憧れの職場にちがいない。

「いまの銭湯って、どういうシステムになつて

るの?」

「うちは、以前は『末広湯』^{すえひろ}って言ってたんですけど、十五年ばかり前に建て替えて『テルメ末広』って名前を変えました」

「ほうっ、しゃれた名前だな。確か、テルメはイタリア語で温泉っていう意味だっけ」

「ええ、元はギリシャ語だったとか聞いたことがあります。建て替えを機会に名前も変え、イメージを一新して、誰でも気軽にゆったり楽しんでもらえるような、明るい雰囲気にしたんです。外見もちょっと料亭みたいなデザインで、『ゆ』の字の暖簾がなければ、ほんとにお料理屋さんと間違えそう。中に入ると番台の代わりに受付とロビーみたいなのがあって、そこから女湯と男湯に行くドアがあるんです」

「ふーん、面白そうだね。いちど行ってみたく

なる」

「どうぞいらしてください」

「だけど、うちからじゃ遠すぎるよ」

「それが、ずいぶん遠くからわざわざ電車や車でいらっしゃるお客さんもあるんです。近頃はお風呂屋さんが減って、楽しみがなくなっちゃっておっしゃって」

「なるほどねえ。それで、きみはその家業の手伝いをしてるの?」

「手伝いっていつでも、大したことはしてません。戦後間もなく、祖父が^{まき}開業した頃は、リヤカーを引いて薪を集めるのに苦労したとか、熱くなりすぎないよう、ぬるくならないよう、絶えず気を配ったという話を聞いたことがありますけど、いまは風呂焚きなんかも全部自動だし、湯加減も自動で調節できるんです。私のするこ

とつていうと、お掃除くらいなもの。これはけっこう大変ですけどね。あとはコインランドリーの面倒を見たり、ロビーでお飲み物のサービスをしたりする、いわば雑用係ですね」

話を聞いただけで、何となく現代のお風呂屋さん事情が見えてくる。

「体験入浴を試してみようかな」

お世辞抜きで、そんな気になった。

「ほんとですか？ 嬉しい」

「今度、きみの留守の時を狙ってね」

「あら、意地悪ねえ。どうしてですか？ 覗い

て見たりしませんよ」

「あははは、そんなことは考えてもないけどさ」

言いながら、浅見のほうが照れた。

「もしいらっしゃるなら、前もってお電話して

ください。車でいらっしゃるなら、うちの駐車場を空けてお待ちしますから。ほんとにほんとですよ。約束しましたからね」

真剣な顔で熱心に誘う。もはや断れない状況に追い込まれた。もつとも、街の風情を体感するには、お風呂屋は最適なシチュエーションかもしれない。文字通りの裸の付き合いで、客同士の間面白い話も聞けそうだ。

2

その日はそれで別れたが、二日後に銭湯行きを実行に移すことになった。瑞恵のケータイに電話して、駐車場を確保しておいてもらい、午後三時の約束をした。真っ昼間から風呂に入る習慣は浅見にはないが、その時間帯はまだ空いていて、お年寄りの馴染み客が多いのだそうだ。

取材目的ならそのほうがいいと瑞恵は勧めた。

北区志茂五丁目は純粹の住宅街。道路はあまり広くなく、路上駐車など絶対に無理。瑞恵は店の前で待機していてくれて、横丁を曲がった所にある駐車場まで案内した。駐車場といっても、ただの空き地みたいなもので、道路との境目に鍵のかかったチェーンが張つてある。

瑞恵が言っていたとおり、「テルメ末広」の外観は料亭を思わせる粹な造りだ。蕎麦屋の清水庵と似通つた造作で、紺地に「ゆ」の字を染め抜いた暖簾もそっくりな江戸風だ。左右に植木鉢を配した御影石の石段を三段上がった所が玄関で、暖簾を潜ると旅館のような上がり框があつて、下足箱に靴を入れる。

この辺りまではかつての銭湯を少し上等にしたような佇まいだが、その先に受付があつて、

ロビー風の空間があるのが相当な進歩といえる。受付にいる中年女性を瑞恵は「母親です」と紹介した。浅見のことはすでに告げてあつたらしく、「娘がお世話になつております」と挨拶された。

ロビーから「男湯」の暖簾を潜つて、つきあたりを左へ曲がると、その先が脱衣所。あとは昔ながらの銭湯——というより、温泉の大浴場をさらに開放的にしたような雰囲気だ。広い浴場の正面の壁は、小松美保子画伯の作と瑞恵が言っていた壁画で飾られている。

かつて浅見が見た小松美保子の絵は、赤い雲が湧き上がる、どこことなく不気味な印象のする瀬戸内の島を描いたものだったが、ここの壁画は同じ瀬戸内海にしても、ずいぶん穏やかな風景である。たぶん油絵ではなく、ペンキで描い

たと思われるのだが、ペンキ職人の描くものよりさすがに上手い。

浴室には老人ばかり五人の客がいた。互いに顔見知りらしく、湯船の中の二人が声高に会話している。浅見が入ってゆくと、新参者しんさんものと見て、無遠慮な視線を浴びせるのには閉口した。もつとも、こつちにもお客たちから話を聞く目的があるから、その程度のことには慣れなければならぬ。

「あなた、お見かけしないが、ここは初めてですか？」

案の定、老人の一人が声をかけてきた。七十歳をいくつか超えたぐらいだろうか。銀髪の見事な、一見紳士風だが、裸ではどういふ素性の人物なのか判断できない。

同じ東京の下町ではあっても、この辺りは嚴

密に言うとは江戸八百八町はつぱちやくやちようの圈外だから、神田かんだや本所ほんじよ、深川ふかがわなどの伝法でんぽうな江戸弁と違って、言葉遣いはごくふつうだ。それにしてもこの老人は丁寧な話しぶりである。

「ええ、初めてです。いい風呂だつて評判を聞いたものですから」

浅見も丁寧に答えた。

「そう、ここはいいですよ。なまじな温泉へ行くより気分がいい。私など、住まいは駒込こまごめに近いのだが、天気さえよければ週に二、三度は来ますな」

「へえーっ、ずいぶん遠いですね」

「なに、地下鉄南北線に乗ればわけない。あなたはお近くかな？」

「いえ、僕は西ヶ原三丁目です」

「なんだ、それじゃ似たようなものじゃないで

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。